

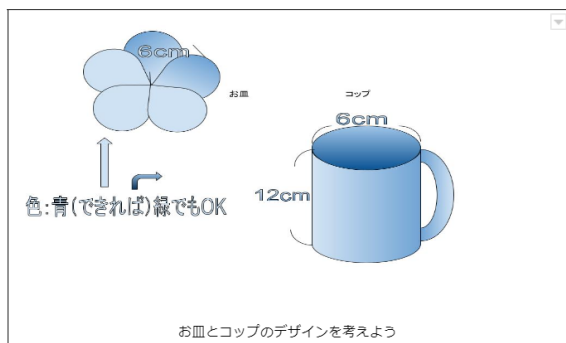


6年2組

私の土器作り
～私の釉薬をぬった本焼き～

2度目の本焼きに挑戦

使える土器にしたい。自分で作ったお皿やコップを使って飲んだり食べたりしてみたいと、土器づくりを進めていきました。まずは、Chromebookを使って、設計図をかいていきました。



○お皿とコップのデザインを考えてみましょう♪

大きさ→結構大きめ 色→青か緑 形→お花型 こだわり→いろんなおかず(?)をのせられるようにしている	大きさ→大きめ 色→青か緑 形→普通 こだわり→自分の手に合うサイズ
---	---

お皿	コップ
設計図 (パソコン上で描いたものを貼ってもOK) 	設計図 (パソコン上で描いたものを貼ってもOK)
大きさ 直径: 9 cm 高さ: 2 cm 色 砂のような色or赤茶 形 上の図 こだわり 簡単にできそうなもの・派手過ぎない・シンプル・素朴	大きさ 直径 上: 7 cm 下: 5 cm 高さ: 10～11 cm 色 茶と緑の間希望 無理そうなら茶 形 上の図 こだわり 簡単にできそうなもの・素朴

お皿	コップ
設計図 (パソコン上で描いたものを貼ってもOK) 	設計図 (パソコン上で描いたものを貼ってもOK) もOK)
大きさ→直径15cmくらい 色→白か黒 形→丸 こだわり→ひびをなくしたい!	大きさ→高さ15cmくらい 色→白か黒 形→垂直 こだわり→中を広くする!

お皿	コップ
設計図 (パソコン上で描いたものを貼ってもOK) 	設計図 (パソコン上で描いたものを貼ってもOK)
大きさ: 大きめに。 色: 青や白にしたい。 形: 横長に こだわり: 薄く。	大きさ: 紙コップより少し大きいくらい。 色: 青や白にしたい。 形: 上に広がるようにつくる。 こだわり: 飲みやすくするため薄く作る!

大きさや色、形、こだわりポイントをそれぞれ考えていきました。そして、この設計図をもとに土器づくりを行いました。子どもたちは、これまで行ってきた方法を使って、土器づくりをしていきました。手回しろくろを使ったり、紙コップや器を型にしたり、ひも状を重ねたり、塊からかきだしたりと自分に合った方法を使って製作していきました。また、今回は電動ろくろを使って製作に挑戦しています。この電動ろくろが何とも難しいです。形を整えようと思っても形が崩れてしまったり、飲み口を広げようと思っても広がり過ぎてしまったりと思うようにいかず苦戦をしているようでした。その中でも、何度も挑戦することでコツをつかんでいる様子もありました。少しずつ回転速度をあげていき手にその感触をなじませるようになっていたり、水の量を工夫し滑らかな表面をしていったりと、電動ろくろで回る粘土の感触を感じながら、それに合わせながら手を動かしていました。そして、「職人さん簡単に作っていたけど、すごかったんだね」とやったからこそわかる職人さんのすごさを再認識していました。

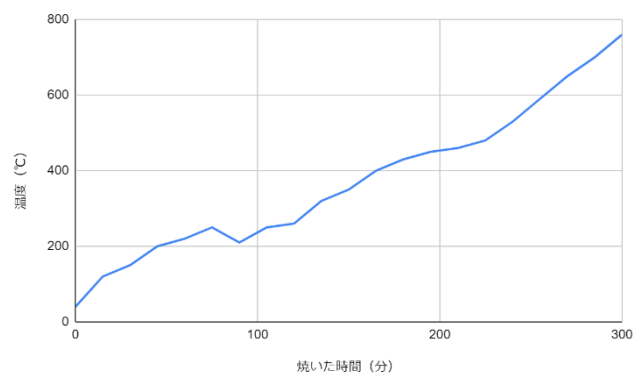
今日は、お皿とコップを両方作りました。お皿は、前に小さくなってしまったから大きめに作って、コップは前よりもっと薄くできるように頑張りました。空気を抜くのを忘れてしまって、土器が割れないか心配です。次に作る時があれば、必ず空気を抜いてつくりたいです。(Rさん)

今日は、コップを作りました。いつもコップの高さが低くなってしまってお皿にできてしまっていたけど、今日は挑戦してこれまで作ってきたことを生かして工夫しながら作ることができたから良かったです。友達にも「上手だね」と言ってもらえてうれしかったです。釉薬をぬってきれいなお皿やコップを作ることができたらいいです。(Mさん)

これまで行ってきた土器作りの学びを生かしながら製作している子どもたちがいました。



製作した作品を灯油窯で素焼きしました。前日に作品を窯に入れ、朝の時間からお昼過ぎまで温度を上げながら代わる代わる火の番をしていきました。温度が800℃近くまであがったところで火を消して、温度が下がるまで待ちました。窯の温度が十分下がったところで窯から取り出し、作品の様子を確認しました。



(素焼きの振り返り)

- ・焼く前は、白色っぽい色で焼いた後は、赤色になった。無事に割れなくてよかった。(Hさん)
- ・色が赤茶色に変化していた。大きさなどは変わらなかった。それぞれ違う色の釉薬を試していきたい。(Rさん)
- ・一回素焼きをしたものをもう一回素焼きするととても濃い赤色になることがわかった。次は本焼きなので釉薬を頑張ろう。(Wさん)



焼く前後の色や大きさを比較したり、割れずに焼けたことに安堵したり、2度素焼きしたものの変化を捉えたりとそれぞれの視点で焼き上がった作品を見つめていました。そして、本焼きに向けての釉薬作りに向かっていきました。



「釉薬をつけて本焼きをして、色が白いところもあったり、茶色いところもあったりしていたから、色もなにかできないかな。(Yさん)」前回の釉薬作りでつるつるにすることはできましたが、色についても工夫ができるかどうかについて考えている子どもたちもいました。そこで、陶芸をやられている高校の美術の先生に教えていただいた「透明釉薬に着色剤を入れると色が出る」ことを紹介し、着色剤となる材料をいくつか提示しました。子どもたちは、前回の本焼きで透明だった釉薬に着色剤を混ぜて、私の釉薬作りを行いました。分量を電子ばかりではかりながら、自分たちの釉薬に思い思いの着色剤を入れて、素焼きした作品にぬっていきました。

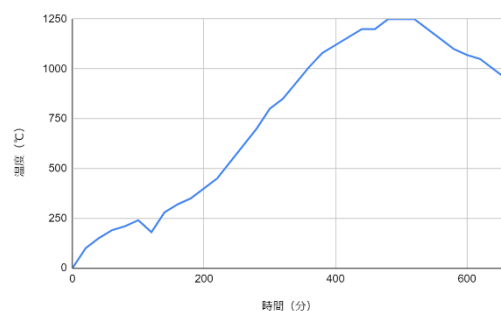


(釉薬作りの振り返り)

- ・釉薬に色を付けて土器に付けたら色が付くのかなんか成分を入れたらどんな色が付くのか分からないので検証したい。(Kさん)
- ・釉薬が完成した。酸化コバルトとコバルトブルーをいれた。どんな色になるのか楽しみ!(N君)
- ・今日は、釉薬づくりで、前に七輪で焼いた土器に青色をつけました。コバルトブルーを多めに入れて、他にも水色や白を入れました。つけてみると、よく染み込んで濃いめの青になりました。焼いてみてどうなるのかとても楽しみです。また、緑や紫もつくったので、それにもつけてみたいです。(Rさん)
- ・今日は、素焼きした土器に色を付けた釉薬を塗りました。前回、釉薬を塗ったときにスプーンだとバラなど細かい部分を塗るときに形が分からなくなってしまったので、今回は、筆や小さい筆を使って塗りました。絵の具を土器に塗っている感じでとても面白かったです。見た感じはとてもいい感じになったので本焼きするのが楽しみです。(Mさん)
- ・今日は、釉薬を作りました。青、緑、紫の粉を使って作りました。紫は、青と赤と白とか色々混ぜて作りました。どんな感じに色がつくのか楽しみです。(Rさん)
- ・今日は、前に作った釉薬を素焼きした土器に塗りました。それで青色の釉薬をきれいに塗れたので良かったです。本焼きで釉薬がしっかり出るようにしたいです。(K君)

子どもたちは釉薬が作品にしっかりとつくように塗り方を工夫し、はたして色がしっかりと出るのか、どのような色が出るのかを検証し、どのような仕上がりになるのか楽しみにしていました。

そして、2回目の本焼きを行いました。朝の時間から交代で火の番を行い、最高1250℃となるように温度を上げていきました。およそ11時間窯に火を入れました。窯の温度が十分下がるのを待ち、次の日に窯から作品を取り出しました。子どもたちは、自分の作品を見つめながら、思うようにいったところやこれから課題としていきたいことを振り返っていきました。



- ・なぜか茶色になっていて残念でした。今回は着色料が多かったということなので、ちゃんと分量を大事に次回は行きたいと思います。(Yさん)

- ・釉薬が思ったよりマットな質感だった。藁灰がガラス質になるって聞いたので今度は前より多めに入れたと思う。あと、土器の高低感を無くして釉薬がバランスよく全体に付くようにしたい。でも、端にだけ付けているのもいいと思った。（Kさん）
- ・つるつるになった土器と粉っぽくなった土器は何が違ったのかなと思った。職人さんは着色料を入れずにきれいな色がまんべんなく土器についているからどうしたら近づけるかもう一回釉薬を作り直したいです。（Mさん）
- ・青色の釉薬を塗ったら緑みみたいな色になったから釉薬の色がそのまま色がでることはないという事がわかった。（K君）
- ・釉薬はぬった色と違う色になることが分かりました。黒→白、青→黒、白→茶でした。どっちみち、きれいな色になったので嬉しいです。（Kさん）
- ・今回作った土器は、底がななめになっていてその溝に釉薬が溜まっていたから、次回は釉薬がたまらないように、底を地面(?)と平行になるように作りたいと思う。（Mさん）

子どもたちは、つるつるになった土器と粉っぽくなった土器の違いを、使用した材料の分量によるものであると考えていきました。着色剤の量が多くなってしまったことやガラス質になる藁灰を多めにするなど、釉薬の材料の性質によってその分量を調整していくことに目を向けています。また、焼いてみたからこそわかる色の変化も捉えていました。そのままの色が出ない釉薬の不思議に気付き自分が思い描く色をさらに追究していくことと思います。今回の本焼きの結果をもとに、よりよい私の土器作りを目指していきます。

【今回の本焼きで製作した作品コーナー】

